庭園 No.105

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田1-6-3 フェリオ西早稲田301号
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX兼用）
E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp　URL:http://nitteikyou.org/
発行者：会長　高橋康夫
編集者：広報委員長　小沼康子
題　字：上原敬二
発行日：2021（令和3）年7月15日

赤城自然園・滑滝（なめたき）石組（筆者設計監理）・植栽による景観障害の状況－成長した樹木が滝石組を覆い隠す。（石材：山梨県牧丘産安山岩）
左：2005. 5月（開園の5年後）筆者撮影　右：2019. 6月（開園の19年後）山田哲也氏撮影

石組の楽しさを教えてくれた人々

鈴木 崇（元監事）

1958年、東京農業大学造園学科卒業。1961年、京都にて井上卓之に師事。1964年より2年間、比国、某財閥の庭園づくりに従事。帰国後、中島健の綜合庭園研究室に勤務。1971年、農大同期の野沢清と野沢・鈴木造園設計事務所を設立し、25年間運営。1996年、互いに独立。長年にわたり武蔵野美術大学建築学科、日本ガーデンデザイン専門学校の非常勤講師を務める。座右の銘：目で確かめる

造園界に入って65年、当年87歳になる。それにしても何がそうさせるのか、造園の楽しさは色褪せない。山頭火の「分け入っても分け入っても青い山」の如く明解な答えは掴み難い。師の中島健の教え「頭で考えるな、心で考えよ」は、造園の本質だからであった。即ち分析より綜合の精神を重視、逃げたがる青い山を引き留めるには、単純に言えば、足し算、引き算の世界。前者は材料や庭の仕掛けを多く入れ、その構成の面白さで表現する庭づくりであり、後者は材料を少なくその土地の地形や環境を活かした庭づくりと言えよう。この対象的な造園の実践者を同時期に親しく知る幸運に恵まれた。前者は、大阪の荒木邦芳であり、後者は、師の井上卓之である。

もう一つの幸運は、名匠小島佐一の知遇を得たことであった。山陰の足立美術館の中根金作の庭に続くエリアを作庭する時、私は現地に呼ばれ構想の図面化を依頼された。小島は私によく話してくれた。「へたな奴ほど名石を使いたがる」と、至言である。石組の気持ち良い音楽性（リズム感など）を表現するなら、無表情な石でも他の石との組合せで寄石効果を出せることもあり、逆に表情があり過ぎる石は他の石で黙らせることもあると知っておきたいものだ。

さらにもう一人、石組の名手、湯浅久作を忘れることはできない。一緒に福島へ石を探しに行き、筆者設計の千葉市おゆみの道・源流部の施工を担ってもらった。名手の仕事ぶりは背後から見ていると次なる一手は何かを想起させてくれ、指定された石が何処へどの姿で据えられるのか興味が湧いた。特に自然風石組は連続的に気勢を展開させ、スリルさえ感じる。気勢の折返し点や収束点の仕掛けをさりげなく収められるのは、湯浅の才能だ。

連続的気勢の石組は自然風の植栽とよく合う。落葉樹や下草、園芸植物まで幅広い選択ができる。中島は早くから草花と調和する石組手法を庭づくりに用いていた。

石の好きな造園家で知られた伊藤邦衛は、私に公共造園の経験を積ませてくれた恩人で、代表作の数々を手伝わせてもらった。計画する石組の石を山まで見に行くほど熱心であった。私に石組の楽しさを教えてくれた人々は既に鬼籍に入られている。

若き造園人よ、昔人の如く盆に砂を盛り小石で石組の研究をせよ。（文中敬称略）

「清澄庭園を国指定名勝にする」

百周年記念事業　清澄庭園再評価プロジェクト

都指定名勝清澄庭園再評価プロジェクト連続講演会　第5回

『清澄庭園の価値と庭木の変遷』

亀山 章

2018（平成30）年3月30日（日）
清澄庭園　大正記念館

【亀山 章 氏プロフィール】
1943年、東京都生まれ。東京農工大学 名誉教授。農学博士（東京大学）。日本自然保護協会 理事長。文化財指定庭園保護協議会会長。1968年、東京大学農学部 農業生物学科卒業後、厚生省 国立公園局技官。信州大学農学部教授。1992年に東京農工大学農学部教授。のち同大名誉教授。
主な著書：『緑地生態学』（共編、朝倉書店、1993）、『自然再生の手引き』（共編、日本緑化センター、2013）、『絶滅危惧種の生態工学』（地人書館、2019）他多数。
受賞：日本造園学会賞（1983）、国立公園協会田村賞（1984）、日本公園緑地協会北村賞（2010）日本造園学会上原敬二賞（2014）他多数。

はじめに

龍居竹之介先生は、東京の庭について「かわいそうなんだよ」と顔を合わせると私に言うのです。そのかわいそうな庭園は二つあります。一つは、誰にも構ってもらえていない旧芝離宮庭園、もう一つがここ清澄庭園です。清澄庭園は、東京都が管理する庭園の多くが国指定の名勝になっているのに、ここだけ都指定の名勝で扱いがワンランク下になっていてかわいそうなのだと言っておられます。東京都は、ここを何とか国指定の名勝にしようという委員会をつくって、動き出しました。

本日は、『清澄庭園の価値と庭木の変遷』というタイトルで三つのお話を用意しています。それは、清澄庭園の変遷、文化財庭園としての価値、文化財庭園の保存と樹木の成長についての話です。

1 清澄庭園の変遷

「清澄庭園」という呼称は、この庭園が関東大震災後に、岩崎家から東京市に寄付された後に東京市によって名付けられたものです。それまでは三菱の「深川親睦園」と呼ばれていたのですが、本日はそのすべてを清澄庭園としてお話することにします。

清澄庭園はどのような場所にあるかという「庭園の立地」、つくられてから関東大震災まで、岩崎家の庭園だった時代の「深川親睦園の成立」、関東大震災後、東京市に寄付されてからの「東京市の庭園整備」の三つの段階でお話を進めていきます。

図1　御江戸絵図（部分）　1859（安政6）年

（1）庭園の立地

清澄庭園はどんな場所にあるのか。江戸時代末期、安政時代の御江戸絵図（図1）には小名木川と仙台堀川の間に『久世ヤマト』と書いてあります。下総関宿藩主久世大和守の下屋敷です。久世家は江戸時代の前期には、老中をつとめた幕臣です。その辺りが今の清澄庭園です。

その東方に、一橋家が10万坪の土地を持っていました。この場所を上からみた景色を歌川広重が「深川洲崎十万坪（註1）」（図2）という版画に描いています。広重は、10代で父の跡を継いで定火消しになりました。火の見やぐらに上り、高い所から見るのが得意だったのでしょうか、高い所から描く絵が多いのです。この絵の出版は1857（安政4）年ですから、明治維新（1867年）の10年前です。岩崎彌太郎がこの土地を購入し、庭園をつくり始めたのが1878（明治11）年ですから、この浮世絵からおよそ20年後です。この頃の深川洲崎10万坪の辺りはデルタ地帯で、ほとんどが湿地ですごくじめじめした場所でした。したがって、この庭園よりさかのぼって、この場所に価値のある庭園があったとは考えにくいのです。むしろ、岩崎家がすごい庭園をつくったのが始まりだと考える方が良いと思います。

図2　歌川広重「深川洲崎十万坪」

（2）深川親睦園の成立

土佐藩の下級武士だった彌太郎は、とても頭の良い人でした。明治の初めに、土佐藩は船を3隻持っていたのですが、藩にはお金がないどころか、藩そのものが維持できないという状態でした。そこで、彌太郎がその船を安く買いとり、海運業を始めました。まず、目を付けたのは郵便事業です。船会社を起こし郵便を運び始めたのです。今の日本郵船株式会社（日本郵船）です。日本郵船は今では扱っている貨物量が世界で2番目に多い巨大な船会社ですが、最初は土佐藩の船を買ったところから始まったのです。

明治政府は、1874（明治7）年に台湾に出兵します。その際、兵や物資を運ぶ船はすべて彌太郎の持ち船でした。1877（明治10）年西南戦争の際には、すでに70隻くらい船を持っていて、これらを全部使って、軍需物資を鹿児島に運んだのです。ものすごいお金が入った彌太郎は、1878（明治11）年、ここ深川の土地、上野と本郷の間にある岩崎家本邸の土地と駒込の六義園を一度に購入しました。

そして、この清澄で庭園づくりを始めたのです。当時の町は水路が道路のように通っており、物を運ぶのはすべて船でした。その水路と自社の船を使って大量の石を搬入し、隅田川から仙台堀川を通じて水を取り込み潮入の池を中心とした回遊式庭園にしました。当時この辺りは隅田川の河口近くでしたので、潮の干満の差を利用して潮入の池ができたのです。2年後の1880（明治13）年にほぼでき上がり、この頃、「親睦」という今でいう「コミュニケーション」のような言葉が流行っていたので、『深川親睦園』という名前にしました。1885（明治18）年、彌太郎は50歳で亡くなりました。考えてみると、猛烈に大金持ちになったのは30代、この土地を買ったのは40歳くらいです。すごい人です。

1886（明治19）年に弟の彌之助が跡を継いで、日本館を柏木貨一郎、西洋館をジョサイア・コンドルの設計で建てました。コンドルは、明治の初めに、日本政府に招聘されたイギリス人建築家です。当時の工部大学校の造家学科（現在の東京大学工学部建築学科）の教授になって、日本に西洋近代の建築学を広めました。清澄庭園の西洋館は、コンドルが民間人のために造った最初の建物です。大変立派なものができていたはずです。どちらも1890（明治23）年に完成しています。

年代を追って実測図を見ると、日本館のある東側は、建物以外は現在とほぼ変わりがありません。西洋館や温室があった西側は、今はありません。門から西に200mくらいのアプローチがあり、隅田川になっています。本当に隅田川から船で来れたのかなと思うのですが、実測図にはそういう形で載っています。

清澄庭園には、大きな石がたくさん使われていて、すごく大胆な造形になっています。日本館の前には、巨石を使った沢飛がつくられています。潮入りの池なので、水位が上下するのに合わせて見え隠れがうまくできていたのだろうと思います。それが、未だに残されていることが大事なのです。その続きの小松石の飛石も残されています。歩く空間をすごく重視していて、飛石にも様々な石が使われているのが特徴です。護岸には大きな石が立っています。本来、護岸は水辺が崩れないようにすることが目的だったはずですが、ここでは造形的に美しく見せるため巨石がたくさん使われているのです。これは明治期になってから、岩崎家

がつくった庭園の大きな特徴です。

この庭園は名石をたくさん使っています。岩崎家率いる三菱の船会社は、この頃、日本の大きな船の7、8割を所有していました。ですから、自社の船で、全国各地から庭石にする巨石を運ぶことができました。赤石もあれば青石もあり種類も豊富です。そして造形的に美しく据えています。彌太郎と彌之助の意気込みが感じられます。

残された西洋館の写真を見ると、池に面した建物とその左側に温室があります。池の護岸は巨大な石組や石積になっていますが、なんか変です。西洋館には日本庭園のような石組は合わないのです。建物の左手のほうに回った所が玄関で、そちらが西洋館の正面です。その前面は、敷き砂利と緑の芝生地によるこの頃流行った芝庭となっています。

1909（明治42）年、3代目久彌がイギリスの陸軍元帥のキッチナーを歓待するために涼亭をつくりました。保岡勝也の設計です。大正記念館から望むと池の対岸にあるのが涼亭です。これまでに補修はしていますが当時のまま残されています。

(3) 東京市の庭園整備

1920（大正9）年、久彌は庭園の南東、涼亭の裏手の約5千坪の土地に児童遊園を造りたいと、東京市の井下清に相談しました。翌年、「清澄遊園」という名で地域に開放しています。テニスコートもありました。井下は後に東京市公園課長となった、東京の公園緑地の生みの親です。

岩崎家は、こういう社会的な事業に非常に関心があったのです。1923（大正12）年9月1日に起きた関東大震災によって日本館が全焼し、西洋館も一部を残して焼失して、多くの樹木も焼けてしまいました。翌1924（大正13）年に久彌は、被害が少なかった東側の部分を東京市に寄付しました。東側部分には池があり、中の島があり、磯渡りがあり、長瀞峡と呼ばれる峡谷部もありました。築山の富士山も見えるし、涼亭もありました。

震災前の図（図3）を見ると、日本館も西洋館も描かれています。震災後、岩崎家から寄付を受けた東京市は、寄付に対する感謝の意を表して「清澄庭園」と名付けました。清澄庭園の名は、この時代から呼ばれるようになったものです。東京市は寄付を受けた東側部分を一つのまとまった庭園にしようと、4年間かけてさまざまな整備工事をしました。1926（大正15）年には樹木の植栽、歩道の整備、庭いすの移設、便所工事などを行っています。1927（昭和2）年には傘亭（註2）を新設しました。

図3　深川邸実測図　1922（大正11）年～1923（大正12）年　（静嘉堂文庫所蔵）

震災前の日本館は大泉水に迫り出ており、池の中に建っているようにも見えましたが、震災後の跡地は広場のようにされ、芝生に園路がつくられていました。

その後、日本館の跡地には大正天皇の葬儀に際し使用された葬場殿を移築し、大正天皇の遺徳をたたえました。前面に芝生を張った芝庭としています。1928（昭和3）年に葬場殿を大正記念館と名付けて、市民の集会場として公開しています。日本館は、岩崎家の迎賓施設として、あるいは三菱の社員たちの親睦のためにといった限られた人たちに使われた建物でしたが、この大正記念館は、市民の集会場として利用されたのです。

同年の終わり頃、清澄庭園はほぼ完成しました。翌1929（昭和4）年に、清澄庭園の由来、特に岩崎家から寄付を受けたことを書いた石碑が設置され、1932（昭和7）年に正式に開園しています。

大正記念館は新たに整備された清澄庭園の主景をなす建物とされ、大正記念館からの景色を正面にし、ここから見える庭園全体のパノラマの景色、景観を一番大事なスポットだと東京市は考えたのです。

昭和初期の清澄庭園とその周辺は、現在までほとんど変わらない状態が維持されています（図4）。西洋館が建っていた辺りには震災前よりもはるかに大きな池を掘って、貯木場にして清澄製材所を営んでいました。ここは深川の木場と近かったので、岩崎家は、震災後、仙台堀川から木材を運び入れて、ここで製材して復興に役立てる事業を展開しました。現在、この場所は清澄公園になっています。

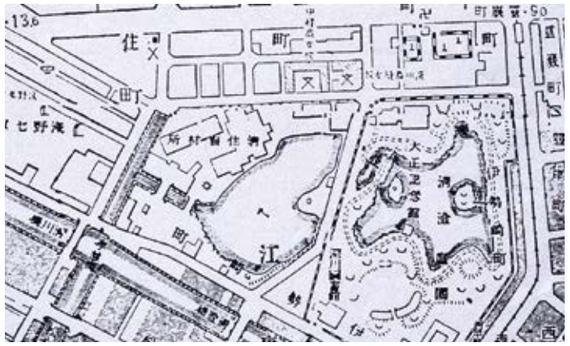


図4　昭和初期の清澄庭園とその周辺（東京公園文庫18より）

最初の大正記念館は、1945（昭和20）年2月25日の空襲で焼失しました。その後、1953（昭和28）年に貞明皇后（大正天皇の皇后）の葬場殿を移築して再建されたのが現在の大正記念館です。

2018（平成30）年の清澄庭園の図面（図5）を見ると、南東部の児童遊園のほか、東側の道路沿いに2階建てコンクリート造の店舗併用住宅があります。昭和初期の建物がそのまま残っています。これは岩崎家が、庭園を管理するのにはお金が要るでしょうからと、ここから上がってくる家賃を使ってこの庭園を管理するようにということで、庭園部分と一緒に寄付してくれたのです。きちんとそこまで考えてくれたのは大変ありがたいことです。しかし、東京市から東京都に移ってから、東京都はそれを土地ごと売ってしまいました。そういうありがたさが全然、分からなくなってしまったのです。

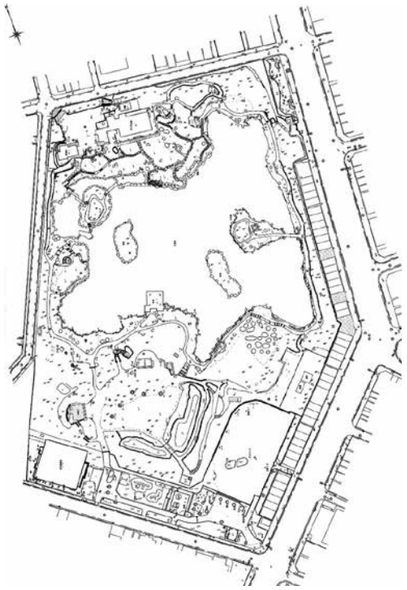


図5　清澄庭園平面図　2018年測量（東京都建設局）

2 文化財庭園としての価値

(1) 文化財の歴史的価値

つぎは、清澄庭園の文化財庭園としての価値の話です。清澄庭園を国指定の名勝にするにはどうしたらよいのかを、今、一生懸命考えているところです。庭園はどうしたら、どういう理由で文化財庭園になるのでしょうか。

文化財庭園には、一般的に、美的・芸術的な価値があります。要は見て美しいという審美的な価値があるということです。もう一つは、歴史的・文化的な価値です。要は文化財としての普遍性、真実性で、いわば本物だということです。それには時間が経過して、その中で価値が定着することが大事で、あまり短命に終わったものに価値を見出さないというのが文化財の分野では一般的に言われています。その時間とは、通常、50年というのが世界の標準です。

文化財を考えるときには、歴史性が非常に大事です。建物や庭園を最初から文化財にしようと思ってつくる人はいません。しかし、後々の時代になって残すべき価値があると考えられるようになると文化財にしようという気運が生まれ、文化財となるのです。

例えば、目黒区駒場公園内の旧前田侯爵邸です。前田家は、江戸時代で最も大きな大名の加賀藩の藩主でした。加賀百万石といわれますが、お隣の富山藩や能登も実は加賀藩の支藩ですから、百万石どころか、はるかにすごい大金持ちでした。現在、本郷の東京大学の敷地一帯は、すべて前田家の上屋敷だったのです。

1871（明治4）年にこの上屋敷の大半が文部省用地となり、東京大学の建設が進行する中で、前田家はその南西の一角に屋敷を構えていましたがその後、東京大学の敷地拡張を機に大学と前田家で土地交換が行われました。前田家は駒場の土地（約4万坪）を提供され、そこに新たな本拠地を移しました。

前田家は、駒場の地に洋館と和館、そしてそれぞれに庭園をつくります。現在、おそらく全国どこを見ても、洋館と和館の建物と庭園がそろっているのは駒場の旧前田侯爵邸しかないでしょう。洋館は、1930（昭和5）年に竣工しました。それぞれの部屋に異なる大理石の暖炉があるすばらしい建物です。前田家は文化財にしようと思って建てたわけではありませんが、50年以上経った2013（平成25）年に、名称「旧前田家本邸」として国の重要文化財に指定されました。

(2) 文化の存在と真実性

もう一つ大事なのは、文化財の指定には、文化が存在するということ

です。ある時代にある文化が存在し、その文化が多くの形あるものを生み出しました。例えば、戦国時代から江戸時代の初期に桃山文化がありましたが、ある時代にある文化が存在し、その中の傑出したものが、その文化を伝える文化財だと考えます。

国分寺市の殿ヶ谷戸庭園（随宜園）はどうして名勝に指定されたのでしょうか。明治から大正、昭和の初めに、東京の郊外に別荘地の流行がありました。中央線沿線の小金井、国分寺から、立川、日野辺りまで、かなり多くの別荘が建ちました。京王線や小田急線の沿線も同様でした。それらの別荘には、地形の特徴があります。武蔵野台地の台地面とその下の低地面の間に落差があり、台地の端から富士山がよく望め、下に湧き水が出ています。そういう場所に多くの別荘が建てられました。

そのような別荘地の中で最も優れたものを文化財に指定しようと選ばれたのが殿ヶ谷戸庭園なのです。ここには、いわゆる別荘文化が存在するということです。そういう意味では近代の財閥の邸宅の庭園文化でもあったので、旧古河氏邸庭園や旧岩崎家住宅、旧前田家本邸などの建物を重要文化財に指定したり、庭園を名勝に指定したりするのも、文化の存在というように考えることができるのです。

もう一つ、真実性も大事です。形があるから見ることができるわけです。徳川頼房と光圀は、水戸徳川家の初代と2代目の藩主です。彼らに会うことはできませんが、彼らが残した小石川後楽園は見ることができます。その形が本物かどうかが大事なのです。その真実性、オーセンティシティーが、文化財の保護の問題にとって大事なことです。ですから、文化財の修復事業をするときには、こんなことをやってよいのかとか、そのようなものが当時あったのかどうかなど、常に議論しています。

奈良の平城宮跡には8年前に大極殿が建てられました。実は平城宮跡は元々湿地だったので、平城宮がなくなってから、ずっと何もなく田んぼとして使われていましたが、平城遷都1300年記念で2010（平成22）年に記念建物として大極殿をつくりました。あの建物の柱の下に昔の礎石があり、それだけが本物で、建物自体は本物ではありません。でも、奈良には転害門などの平城京の時代の建物があるので、建築様式をそこから類推してつくったものなのです。今は本物ではありませんが、これは100年も経つと、多分、重要文化財になるでしょう。平城遷都1300年記念という歴史的ないわれのはっきりしている文化財になりますから、大事にしなくてはいけないものです。

本物ではありませんが重要文化財になったという例があります。京都の平安神宮は、1895（明治28）年に平安遷都1100年記念で、応天門と大極殿を実物の8分の5の大きさで造って神宮にして、平安遷都をした桓武天皇を祭神にしたものです。模型というか、縮小版です。京都の人たちは、明治天皇が東京に行ってしまって、寂しくてしようがなかったので、お金を出し合って、これを造ったのでしょう。これは大極殿の本物ではありませんが、1100年以上経ったということで、2010（平成22）年、「意匠的にすぐれているもの」「歴史的価値の高いもの」と評価され、重要文化財になっています。

（3）名勝としての価値

清澄庭園の名勝としての価値についてお話をします。地割・意匠の視点、歴史・文化の視点、鑑賞・観賞という視点で見てみたいと思います。

地割・意匠の視点

清澄庭園は明治時代になってから最初につくられた大規模な庭園であり、大泉水を中央に配した大名庭園に類する庭園です。しかし、その地割は大名庭園のように各所に各地の景勝地を置くものではなく、庭園全体として大きな風景をつくり出すところに特徴があります。そのような地割の上に、大胆な意匠で庭園の各部の景をつくり出しています。その特徴は、大胆な護岸の岩組、飛石、枯滝の石組、富士山のふもとの立石など、巨石と名石を非常に多く使っていることです。それまでになかった新しい日本庭園だといえます。

歴史・文化の視点

文化財は、50年くらい経たないと評価されないという話をしましたが、清澄庭園は1878（明治11）年に土地を取得して作庭を開始し、形が完成するのは、彌之助の時代になった1891（明治24）年に2つの建物が完成したときです。土地取得から1923（大正12）年の関東大震災までの45年間は、岩崎家・三菱の「深川親睦園」の時代です。その後、東京市に渡ってから庭園が復興整備され、「清澄庭園」として開園したのが1932（昭和7）

年ですから、今日まで90年経っています。つまり、私たちはこの庭を「清澄庭園」として90年間ずっと見てきたわけです。

鑑賞・観賞の視点

鑑賞・観賞の視点での価値を考えてみます。震災の直前に、日本建築学会が設立25周年記念で深川邸（深川親睦園）を見に来ています。そのときの順路は、池のほとりをずっと回っています。日本館を回って、そして最後に西洋館に行っています。この庭園はいかに池を巡って景色を見ることが大事かということが、よく分かります。つまり、回遊式の庭園です。

版画家の川瀬巴水が1920（大正9）年に清澄庭園を描いています。これは、久彌が招待客へのお土産用に描かせたと言われています。『三菱深川別邸の図』は十数枚あります。その中で西洋館が描かれているのは「洋館より庭園を望む（図6）」の1枚だけです。唯一、西洋館が描かれているのですが、庭園の風景としては少し異質だと思います。その他はすべて日本館を中心にした東側の庭園が描かれています。「松の池畔の涼亭（図7）」は涼亭や島があり、手前にアカマツが描かれています。この辺の景色は、今と全く同じです。アカマツがクロマツに変わってしまっているだけです。これは多分、大気汚染にアカマツが非常に弱く、その後枯れてしまったから、強いクロマツを植えたということでしょう。「月夜（大泉水）」では、奥に月下の富士山、池には月が映っています。「池畔客室の雪」は、池にせり出す日本館とその前の沢飛石の構図です。現在、これらは建物以外すべて残っています。川瀬巴水が描いたのは、東側部分の庭園であったということは、この庭園の鑑賞上の価値がそこにあったということです。

図6　川瀬巴水「三菱深川別邸の図　洋館より庭園を望む」（原徳三氏提供）

図7　川瀬巴水「三菱深川別邸の図　松の池畔の涼亭」（原徳三氏提供）

以上の三つの視点からみて、清澄庭園の文化財としての価値をまとめると、規模といい、地割といい、意匠といい、最も優れた近代の日本庭園であることは間違いありません。

東京市が庭園の寄付を受けてから、これを独立した庭園にしようと、大正記念館を建てて、そこからのパノラマを主景にした庭園としました。東京市がつくった初めての公共庭園です。それが90年間続いているということが、清澄庭園の文化財としての価値だと言えるでしょう。

3 文化財庭園の保存と樹木の成長

最後に、文化財庭園の保存と樹木の成長というお話をします。庭園の景観をつくる材料には、土と水と石と木が挙げられます。特に樹木は生きた景をつくっていきますが、一方では成長したり枯れたりします。これとどう付き合うかというのが、文化財庭園を考えるときに常に悩ましい問題です。樹木は文化財庭園に対して、どのような悪さをするかというのを挙げてみましょう。

樹木が成長すると、景観が変化したり損傷したりします。また、歴史性や真実性から考えると、歴史的に存在しない樹木はすごく多いのです。さらに、樹木が成長し根や幹や枝がどんどん大きくなると、建物や園路を壊したりします。また、他の樹木を覆って生育を抑えるという問題もあります。その成長を何とかしよう

図8　大正記念館から富士山を望む（2018.3.30）

とするのですが、なかなか技術が伴わないので、文化財庭園の保護にとって実は樹木の問題はすごく大きいのです。しかし、この問題に関係者はなかなか着目してくれません。

清澄庭園では、クスノキが多くてどうしようもない状態だというのが私の感想です。外来植物のトウネズミモチが５００本もあり、全部伐採したいのですが、なかなかそうもいきません。大正記念館からの景色（図８）を見てください。正面に見える富士山が樹木に覆われています。大木はみなクスノキです。標高３７７６ｍの富士山の奥に樹高７０００ｍくらいの樹木がそびえているなんてあり得ません。

樹木は勝手に侵入してきて成長するのです。クスノキやトウネズミモチは種子が大量に供給され、勝手に増えていきます。そして格段に成長が早く、庭園にとってはやっかいな樹木です。さらに日照をめぐる競争でも断然強いので、非常に困っています。剪定の技術が追い付かないというのが現状です。

小石川後楽園の樹木の成長を示すグラフ（図９）があります。胸高の地上１ｍ30㎝で、幹周を測り、年間にどのくらい伸びるかを記録した

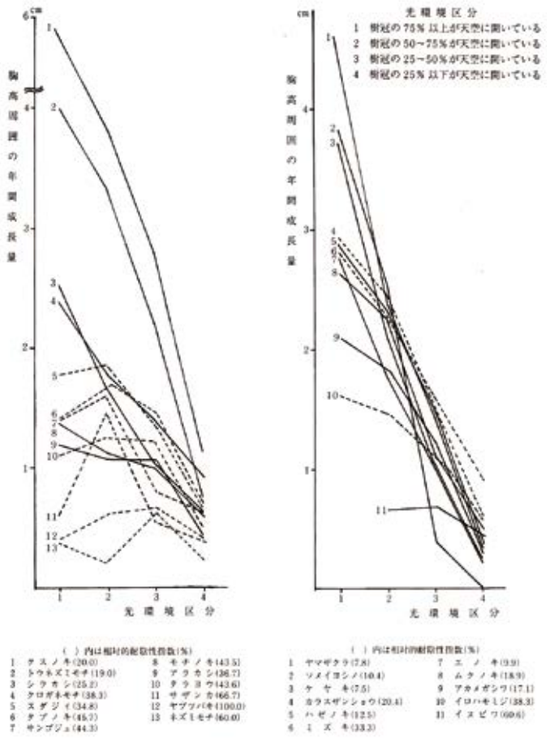


図9　小石川後楽園における樹木の光環境と年間成長量との関係 (註3)
左：常緑広葉樹、右：落葉広葉樹

データをグラフにしています。常緑樹の１番は、断トツでクスノキです。日当たりの良い所だと年間６㎝くらい、すごい勢いで太くなります。２番目がトウネズミモチです。ずっと下がってシラカシ、クロガネモチも比較的成長の早い樹木です。従来の庭木ではないトウネズミモチとクスノキは、圧倒的な勢いで伸びますので、庭園に植えてはいけないのです。

落葉樹では、ヤマザクラとソメイヨシノとケヤキの成長が目立ちます。ヤマザクラやソメイヨシノといったサクラ類やケヤキは庭園に植えてはいけません。これらの樹木は庭園にとってはものすごく破壊的な成長力があることを知っていただきたいのです。

大正記念館から正面に望む富士山の右下に切り株があります。これは、クスノキの切り株です。最近、倒れたため切ったのですが、根元を測ったところ直径が１ｍ２㎝ありました。真ん中に15㎝くらいの穴が開いていて、その周りの年輪を数えたら、樹齢73年くらいと分かりました。今年は２０１８（平成30）年ですから、73年前というと１９４５（昭和20）年です。東京大空襲の際に焼けて、その後に芽吹き再び伸びたと思われます。わずか70年くらいの間で、もの凄い巨木になってしまったのです。樹木の成長は恐ろしいです。

エノキ、ムクノキ、ミズキもすごく成長の早い落葉樹です。これらの樹木は鳥が種子を運んで自然に生えてきたものです。油断していると、こういう樹木で庭園が覆われ尽くされてしまいます。いずれにしても樹木は自然に侵入してくる恐ろしいものです。文化財庭園の破壊者であると言えます。

樹木の伐採、伐根を考えるときに、大事な課題があります。一つは文化財保護法で現状変更に相当するので、木はとても伐りにくいということがあります。もう一つは、管理技術や施工技術で考えますと、木を伐る技術を持っている人があまりいなくなってきていまして、特に大きな木を伐るのは容易なことではないのです。ただ、何とかしないことには、庭園はどうしようもない状態になる可能性が多分にあるのです。緑豊かっていいね、なんて言っていられない状態になっています。

庭園は樹木など植物を観賞する場でもあります。歴史を忘れても、美しさに引かれることができる。史実を知らなくても観賞できるというところが庭園の少し難しいところです。例えば、六義園はシダレザクラがいいよね、なんて平気で言ってしまう。六義園のシダレザクラが植えられたのは、つい最近です。元々あそこは、シダレザクラがあるような場所ではなかったのです。つまり、六義園が何たるかを知らなくても、六義園のシダレザクラをみんなが見に行くようになってしまっています。考えてみると何か変なものだなというところもあり、このようなことも考えなければならない状況、事態になっているわけです。

庭園の管理の課題を考えるときに、大事なのは真実性の確保ということであるならば、シダレザクラはなかったと言えなくもない。ただ、時代のニーズの変化とか、あるいは利用者へのサービスの在り方を考えたときにどうしたらよいかということが、文化財庭園としての課題でもあります。

樹木の管理については、大きな木は全部伐採した方が良いと思います。樹木が大きくなると庭園が狭く感じられるからです。しかし、一方で多くの庭園では、周りのビル群が庭園内から見えるので、目隠しになっているような樹木は、なるべく残すしかないという気もしています。

清澄庭園の富士山については、両側の稜線にかかっている樹木、多くはクスノキですが、それらをまず伐採した方が良いでしょう。少し間を空けると、山が山らしく見えるのです。後ろの緑が壁になって、手前が富士山として浮き立ってくるわけですから、そう考えると良いでしょう。風景がそれとしてきちんと見えるような形で手を入れていくことが大事だと思います。

庭園には新たな価値が求められることがあります。特に最近よく言われる生物多様性の保全です。また、海外からの観光客に対して、日本文化をどう伝えるかというような文化交流の面もあります。先日、雨の日に写真を撮りに来ましたら、池にたくさんのカモがいました。最近の清澄庭園はバードウオッチャーが多いのです。今や清澄庭園といえばバードウオッチングだと言う人がいるくらいです。これも庭園の持つ大事な要素です。特に東京のような都市化された所には、ほとんど自然がないですから、こういう野鳥が見られること自体が、重要な価値であると言えるのではないかと思います。このようなことから、文化財庭園をどのように管理していったらよいかというのは、大事なことになってきています。

さらに大きな課題として、管理技術の問題とそれを担う人材が非常に少なくなっているということが挙げられます。管理技術を有する庭師がいなくなってしまい、伝統技能が継承できないということもあります。また、機材・道具、植木や石材の課題もあります。特に石材に関しては本当に資材がありません。先日、都内の名勝庭園で、池の護岸に玉石を入れる際に、材料確認をしました。その袋にはフィリピン産と書いてありました。どうしてフィリピン産かというと、実は、日本産が手に入らないのです。そのような状況が各地で見られている中、新しい技術や材料でどのように対応するかということも課題になっています。

これまでお話したように、文化財庭園にはなかなか難しい問題が多くあります。

おわりに

本日、私が皆様にお伝えしたいのは、清澄庭園は国指定の名勝にすべき価値があるということです。何で指定ができないかというと、庭園の面積が当初の半分しかないという意見があります。このことについて、私は次のように考えています。当初の庭園は三菱の「深川親睦園」です。しかし、これは40年あまりで震災で建物などは消失しています。その後、被害が少なかった東側部分が東京市に寄付され、東京市はこの部分を一つのまとまりのある庭園として整備し、「清澄庭園」と名付けて90年近い年月が経っています。「清澄庭園」は東京市が「深川親睦園」の遺構をもとにして、新たに整備した公共庭園です。日本館にかわる大正記念館は、池との間を幅広く芝庭にしてここから見える庭園全体のパノラマ景を主景にしています。園は回遊式庭園としてのまとまりをもち、「深川親睦園」の遺構を受け継いだ巨石・名石から成る庭園として存続しております。つまり、一つの完結した庭園であり、その地割と意匠は比類ないものと言えるのです。国の名勝にふさわしい庭園です。皆さんもぜひ、すごく良い庭園だと宣伝していただけるとありがたいと思っています。

（東京農工大学　名誉教授）

註1　歌川広重『名所江戸百景』の中の１枚、１８７８（安政４）年、国会図書館デジタルコレクション

註2　東日本大震災で被害を受けて安全に利用が出来なくなったため、２０１２年１月に撤去された。

註3　亀山 章「小石川後楽園の樹木の生育特性について」『応用植物社会学研究』NO・15、応用植物社会学研究会、１９８６

出典：『ランドスケープ研究』Vol.83増刊　作品選集、日本造園学会、2020年3月16日発行

【エイジング・マネジメント部門】

東日本大震災復興記念庭園

The Great East Japan Earthquake Reconstruction Memorial Garden

宮城県黒川郡
Kurokawa-gun, Miyagi.

高橋 康夫　Yasuo Takahashi　廣瀬 慶寛　Yoshihiro Hirose
菊地 正樹　Masaki Kikuchi　内田 均　Hitoshi Uchida
横山 英悦　Eietsu Yokoyama
一般社団法人　日本庭園協会
The Garden Society of Japan

東日本大震災復興記念庭園の植栽 Planting for the Great East Japan Earthquake Reconstruction Memorial Garden（'17.10　撮影 ササキ シゲル）

造成前の下刈り Removing Undergrowth（'13.06）

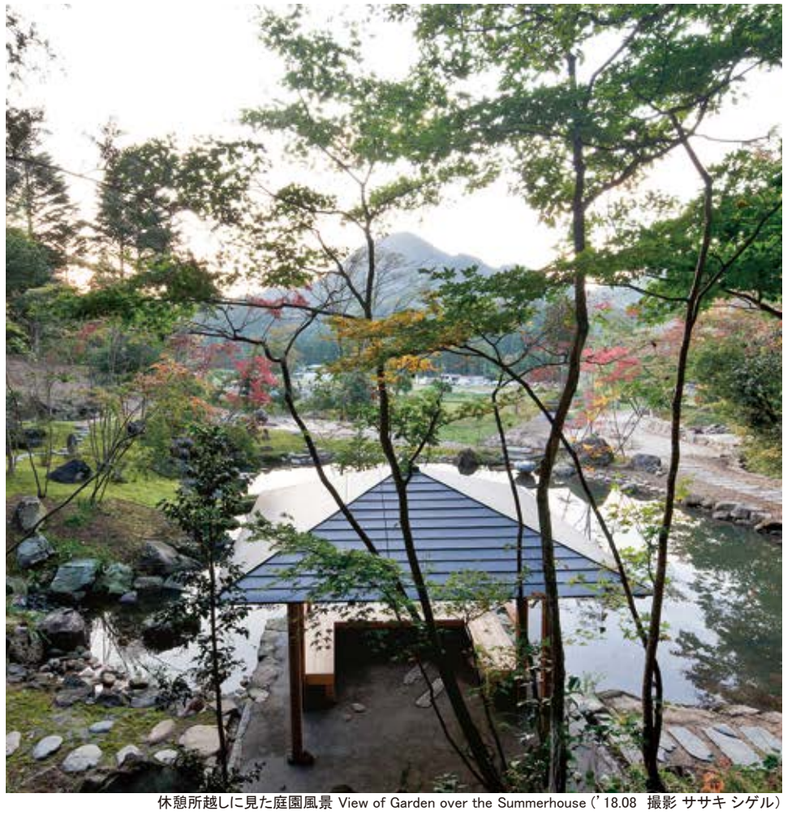
護岸工事 Arranging Rocks for the Cave（'16.10）

土橋づくり Making the Earthen Bridge（'15.10）

日本庭園協会は1974年より築庭研修（伝統庭園技塾）を開催してきたが，つくった庭はすぐに解体され，研修成果が残らなかった。そこで，永久に残せる築庭場所を探し，宮城県黒川郡大和町の覚照寺の所有する山林原野約4000㎡の提供を受けることとなった。構想の途上，東日本大震災に遭い，計画が頓挫した。震災2年後，震災の鎮魂と復興を願う名園をつくりたいという思いで，東日本大震災復興記念庭園の築庭を決め，宮城県支部設立と庭園協会創立100周年記念事業として築庭に取り掛かった。資材や経費は，参加者や協会会員，地元住民等からの寄付で賄った。2013～2018年の28日間の築庭研修（海外参加者含む）と支部会員のボランティア，延3,500名以上の参加で完成させた。築庭作業により，伝統的手法と現代技術を融合させ，熟練者から若手への技術の伝承が行えた。

この庭は，池泉回遊式で，背後の森林と西側の山を庭に取り入れ，山裾の地形を生かしながら，沢水を利用した幽玄な空間演出を行った。農業用貯水池跡を修復した三つの池を人生にたとえ，誕生（沢の滴り水）➡幼年期（第一の池）➡激動の壮年期（第二の池）➡成熟期（第三の池）へと流れ，西側にある笹倉山を須弥山に見立て，魂はそこに帰っていく構想とした。池の周りには，園路，水鉢，洞窟，石橋，土橋，休憩所を設け，樹木や石造品をポイントとし，回遊しながら庭の変化を楽しめるようにした。休憩所からは，中島に架かる土橋の先に笹倉山を主景として眺めることができ，池中に水鏡で山が映るよう工夫した。資材においては，津波で流されて廃棄物となった庭石や，震災後の造成時に不要となった石材を，再生を意識して各所に再利用した。土橋の材料の栗丸太は現地の山林から切出し，休憩所の柱は造成時に伐採し製材したスギを用いた。現地の山の樹木を移植し，地域から寄付されたコケを庭に貼り付けた。

今後，完成した庭の管理や周辺の整備を庭園協会の修業道場として活用し，地域の活性化に貢献する新たな観光資源を目指したい。



休憩所越しに見た庭園風景 View of Garden over the Summerhouse（'18.08　撮影 ササキ シゲル）

山取り木の植栽 Transplanting Trees（'16.10）

廃材利用の飛石　Stepping Stones（'18.05）

平面図 Plan

堤・滝石組の完成　Arranging Rocks for the Bank and the Waterfall（'14.10）

The Garden Society of Japan offering garden design training (Traditional Garden Landscaping School) found a place to make a garden, but during the course of designing, the plan was derailed by the Great East Japan Earthquake. Two years after the earthquake, we decided to design the Great East Japan Earthquake Reconstruction Memorial Garden to pray for the souls of the victims and for disaster recovery. Materials were supplied and expenses were funded by donations from those involved with making the garden, members of the Society, and local residents. The garden was constructed with the efforts of over 3,500 people consisting of landscaping trainees (including from overseas) and volunteer Miyagi branch members.

Construction materials including rejected tsunami-driven garden stones and disused stone materials from developments after the earthquake were reused in various places as symbols of regeneration. Chestnut logs from local forests were used for the earthen bridge, and cedar lumber from the development site became pillars of the summerhouse. Trees from woodlands close to villages (satoyama) were transplanted to the garden, and moss was laid as a donation by the local community. We hope this garden will offer a new tourism resource that contributes to revitalization of the community.

作品評（渡部　桂）

震災の惨状は人々に無情を抱かせた。秩序ある美の欲求は人の本能的な混沌への反応にも見える。東地は歴史的に由緒ある土地だが近年は閉ざされ，今回の整備で水や緑が持つ美が息を吹き返した。鎮魂の場でありつつ技術修練の場であり，随所に造園のボキャブラリーが散りばめられ見どころが多い。各所からの景色は周縁の二次自然と境界無くダイナミックに繋がる。材料から空間の見立てまで，有るものを上手く使うと言うことが本園の成り立ちに思える。震災後の世界観にも通じる。なお本園は2019年台風19号で被災し，現在復旧が進められている。

追悼　池田昭平氏

池田昭平さんとの思い出

石川治壱

去る3月11日、日本庭園協会新潟県支部にて活躍された池田昭平氏がご逝去されました。満79歳でした。

池田昭平さんとは昨年30周年を迎えた当協会新潟県支部を通じての長いお付き合いで、これまでの様々な思い出があります。

私が新潟に帰ってきて間もない1994（平成6）年、当協会（新潟県支部）と田中泰阿弥の研究会に入会させていただきました。当時、田中泰阿弥のもとで働いていた藍澤信義さんの聞き取り調査に参加し、池田さんの司会で進行された調査は印象的でした。その帰り道お邪魔しましたが、それが池田さんが代表を務める（株）池忠造園へ行った初めての機会でした。

故・池田昭平さん

その後、池田さんは当協会新潟県支部の2代目支部長となられ、数々の支部活動や田中泰阿弥研究会で一緒に行動するようになりました。1999（平成11）年には支部長から相談役になられた池田さんでしたが、支部活動には数多くの貢献をされていました。積極的に支部活動をリードし、また楽しんでおられた様に記憶しております。

支部活動の中で徐々に話す機会も増えてきた頃、池田さんの地元の柏崎市にある国指定名勝庭園「貞観園」の修復事業に当協会本部と新潟県支部が取り組むこととなり、私自身も貞観園の業務に深く関わることとなりました。2006（平成18）年頃から貞観園の工事が本格的に始まり柏崎に行く機会が多くなって、工事の相談など事あるごとに池忠造園さんにお邪魔しておりました。貞観園の業務について地元の池田さんが協力して下さるのは本当に心強く思いました。

2007（平成19）年新潟県中越沖地震の際には、池田さんの会社自体も甚大な被害を受けたのにも拘らず、すぐさま貞観園の事を心配しておられました。その後、地震で傷んだ貞観園内の石造物などの修復に多くのお力添えをいただきました。被害にあった「貞観園の標石」修復工事には、自ら貞観園にふさわしい台座の石材を探し出し、それを一冬かけて自社の工房で加工され、その見事な施工を一緒に行うことができたのが一番の思い出です。

池田さんの会社を訪ねると、まず何種類ものパターンを違えた見本庭園の見事さに目を奪われました。その庭園にはたくさんのアイデアが盛り込まれ、池田さんの懐の深さと見識の広さを一眼で理解することが出来ました。最初に伺った時は夜分で暗く、会社の様子がよく分からなかったことにこの時、気が付いたのです。その後、事務所に伺うと「お茶でも飲んでいけーいや」と優しく声をかけていただき、当協会の話や人生経験豊かな様々な話を楽しく聞かせていただきました。

その後も造園など業務の知識に留まらず、支部運営に欠かせない見識と判断力で私たち後進の指導に当たっていただきました。長い時間をかけ私たちは大切な先輩である池田さんから本当に多くを学ぶ事が出来ました。今も時々池田さんの「石をも貫く硬い志」を思いかえすことが、私にとっては人生を生きるための羅針盤となっています。

現在、池忠造園はご子息の桂さんが社長となり立派に引き継がれておられます。また、桂さんは新潟県支部でも活躍され、貞観園の最終年度の施工を一緒にさせていただき、その業務を見事に完成させ、池忠造園の伝統「池田昭平イズム」を後世に伝えるべく大奮闘中です。

貞観園修復方針検討委員会で、熱い眼差しの池田昭平氏（左奥）

貞観園の修復作業現場での打合せの様子（左・後ろ姿）

池田昭平さんの会社を訪ねると、まず何種類ものパターンを違えた見本庭園の見事さに目を奪われました。その庭園にはたくさんのアイデアが盛り込まれ、池田さんの懐の深さと見識の広さを一眼で理解することが出来ました。最初に伺った時は夜分で暗く、会社の様子がよく分からなかったことにこの時、気が付いたのです。その後、事務所に伺うと「お茶でも飲んでいけーいや」と優しく声をかけていただき、当協会の話や人生経験豊かな様々な話を楽しく聞かせていただきました。

左、右共：貞観園の修復作業を見守る池田昭平氏（後方ブルーの服）

その後も造園など業務の知識に留まらず、支部運営に欠かせない見識と判断力で私たち後進の指導に当たっていただきました。長い時間をかけ私たちは大切な先輩である池田さんから本当に多くを学ぶ事が出来ました。今も時々池田さんの「石をも貫く硬い志」を思いかえすことが、私にとっては人生を生きるための羅針盤となっています。

現在、池忠造園はご子息の桂さんが社長となり立派に引き継がれておられます。また、桂さんは新潟県支部でも活躍され、貞観園の最終年度の施工を一緒にさせていただき、その業務を見事に完成させ、池忠造園の伝統「池田昭平イズム」を後世に伝えるべく大奮闘中です。

池田昭平さんは今でも、桂社長や池忠造園のスタッフと日本庭園協会新潟県支部を優しく見守って下さる気がします。これまでいただいた数々の温情に感謝し、この文章を閉じさせていただきます。池田昭平さん本当にありがとうございました。

（新潟県支部・副支部長）

追悼　向川茂氏

向川茂さんの早すぎた旅立ち

本田壽

石川県支部長4代目を6年間勤め上げたのち、この3月27日に不治の急病のため、67歳で逝去された向川茂さんの造園人生のエピソードを少しばかりではありますが、長年の友人の一人としてお話しさせていただきます。

向川さんは、石川県造園業協同組合の青年部の頃より、将来を背負って立つリーダーとしての素質を十分に感じさせる出来事が多かったと思い出されます。

その中で、1992（平成4）年に金沢市と姉妹都市である中国江蘇州蘇州市に、日中友好のシンボルとなる日本庭園をプレゼントするべく押し掛けた、ということがありました。押し掛けた、とは乱暴な言い回しになってしまいましたが、時代はバブル崩壊からの不景気真っ盛り、沈滞ムードが蔓延していた頃でした。彼は、「こんな時だからこそ何かをしなければいけないのではないか」と、口癖のように常に投げかけていました。それは同時に、世間に広く造園業界をアピールし、個人の意識改革を図り、人対人のネットワークを作るという三つの目的を意味することでもありました。結果として彼は、同年5月29日から、「蘇州造園工事ミッション」の名の下、彼を団長とする一行20人が蘇州市を訪れ、9日間に渡って蘇州最大の庭園「拙政園」内の東園の一郭に石川県の形を模したデザインの日本庭園（日中友好庭園）を施工・完成させました。最終日には当時の章新勝蘇州市長および山出保金沢市長に参加を賜り、完成式を行いました。

故・向川茂さん

県支部長として2016（平成28）年には、全国の日本庭園協会会員に参加を募り、赤松剪定・雪吊り・水鉢等の雪対策およびコモ巻き

の講習会を、一泊二日で「いこいの村能登半島」内建物周辺でミニ塾を開講しました。企画提案や役割分担に係る根回し等、彼の采配は丁寧かつきめ細やかであり、支部会員の協力を引き出すに十分なものでありました。また、彼の声掛けの仕方や気遣いにも団体長としての責任感と風格がありました。ひとえに、先輩諸氏も多い金沢青年会議所で長年経験を積まれたことによるものと思いました。

そのほか、モスクワ（ロシア）、ワルシャワ（ポーランド）での茶会を通じての国際交流委員の体験を、興味深く拝聴したことも思い出深いです。彼の、親しみやすく、人好きのする性格は、異文化圏でも存分に発揮されたことでしょう。国際日本庭園シンポジウムに参加・同行された龍居竹之介名誉会長をはじめ、高橋康夫会長、三橋一夫国際活動委員長もご存知の事と思われます。

２０１６（平成28）年８月に、当協会の仲間である甲府市の田中徳夫さんを交えた数名で、中国の大連市へ石造品の共同購入に出かけたことがありました。向川さんは30年程前から、中国蘇州に海外出張所を設立し、石材の輸入などを手掛けていました。向川さんのお陰で、現地の石材問屋から古レンガ、六方石、彫刻プランター等を廉価に購入する恩恵に預かることができました。異国での交易の難しさを承知しながら、海千山千の中国商人とも堂々と渡り合っていける力量は、どこに隠れていたのか計り知れない人でもありました。

金沢の街角で、ふと、巨大な六方石のオブジェを見ることがあれば、向川さんの作品かもしれないと偲ばれることでしょう。

彼は、これから先も多くの後継者を育てあげ、鋭い時代感覚を持ち合わせた造園人（また茶人でもあり文化人）として我々と共に歩んで貰いたかったと、本当に悔やまれます。

向川さんの生前の功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

（正会員
元石川県支部長）

完成した「拙政園」内の日中友好庭園（1992.6月　大田徳重氏撮影）

石造品購入のため訪れた中国・大連市にて
左から中田正敏氏、筆者、向川茂氏、田中徳夫氏（2016.8.30）

蘇州市「拙政園」内の日中友好庭園完成式　章蘇州市長に目録を贈呈する向川茂氏（和服姿）と山出金沢市長（前列中央）（1992.6月　大田徳重氏撮影）

新役員紹介

新副会長

内田（うちだ） 均（ひとし）

１９５８年生まれ
神奈川県横浜市出身

この度、副会長を仰せつかりました。１９８２年、社会人３年目、農大の農場教員として作庭や樹木管理を教えていた時、当協会を知り、スキルアップを図ろうと入会しました。岩城亘太郎先生の伝統庭園技塾で茶庭づくりを体験し、北村信正先生の中国庭園研修会にも行き、「東日本大震災復興記念庭園築庭」には指導者、記録係として５年間参加し、現在は、庭園協会ニュースの編集委員をしています。先輩方へのご恩返しをして次世代につなげていきたいと思います。

新評議員

小林（こばやし） 紀昭（のりあき）

１９５８年生まれ
新潟県刈羽村出身

私がこの世界に入ったのは、37歳の頃で、造園とは全く畑違いの場所からの転職でした。仕事を始めて、２年くらいしてから、当協会に入会させていただきました。いろいろな方からのご指導や研修・見学会等により、庭づくりは面白いと感じました。それから、もう20年以上がたち現在の私があるのは、当協会でお付き合いをいただいた方々がいたからだと思っています。皆様には、本当に感謝しております。そのようなことから、私の好きな言葉は「一期一会」です。この言葉を大切にこれからも精進していきたいと思います。自分自身を育てていただいた新潟県支部に対し感謝の気持ちをもって、支部長をさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

（新潟県支部長）

中山（なかやま） なつ希（き）

１９６９年生まれ
東京都出身

「庭」を通じて多くの出会いがあります。その出会いの一つが、当協会でした。そこには、「庭」に対する志が高く、情熱の熱い会員の皆様がいらっしゃり、講座や会員誌を通じて絶えず刺激を受けています。これからも「庭」やそれをとりまく人々の魅力や想いを敏感に感じとれる感性を磨いていきたいと思っています。

宮本（みやもと） 広之（ひろゆき）

１９５８年生まれ
石川県津幡町出身

支部事務局を担当していた頃には、度々東京やいろいろな所に足を運ぶ機会もありました。しかしその任を離れると、開業した北陸新幹線に未だ乗車経験もなく、ひたすら地元で作庭や管理に勤しんで参りました。以前より打診がありました支部長就任でその機会もあるかと思った矢先のコロナ禍です。ズーム会議で関係者の方々にはお目にかかれましたが、直接お目にかかる折にはよろしくお願い申し上げます。

（石川県支部長）

山田（やまだ） 祐司（ゆうじ）

１９７４年生まれ
新潟県見附市出身
埼玉県支部長として

これからの支部活動を通じ、あらためて基本的な技術を見直し、新たな庭の創出につなげて行きたいと思っております。私たちが活動の中で習得したものが形となり、また次世代に庭の世界をつなげていけるよう、充実した支部活動を目指します。

（埼玉県支部長）

由比（ゆい） 誠一郎（せいいちろう）

１９７３年生まれ
東京都出身

小さい頃からものづくりが好きで、人に囲まれるより自然に関わる仕事がしたいと思っていました。もともと父が営んでいた造園業の道に進むことにし、専門学校卒業後は石正園で修業をさせていただきました。そのご縁から当協会にもお世話になり、日頃から勉強の機会をいただいています。評議員として自分なりにできることに尽力いたします。

本部からのお知らせ

『日本庭園の「こころ」と「わざ」に関する研究推進委員会』について

日本庭園の技術をユネスコ無形文化遺産へと登録推進の機運が高まるなど、日本庭園が再び脚光を浴びている今日、「日本庭園の価値の普遍性を立証」する必要があるとして、東京農業大学の粟野隆教授（当協会評議員）の提案で、日本造園学会に設けることになった委員会である。

提案者である粟野教授を委員長として19名で構成されており、当協会からは、高橋康夫会長、小沼康子常務理事（広報委員長）が推進委員

として参加している。活動期間は2021・2022（令和3・4）年の2か年である。この委員会は、日本庭園協会及び日本造園建設業協会、日本造園組合連合会、京都府造園協同組合、日本植木協会など造園関係団体と造園・文化遺産の学識者や専門家らが協力しながら調査研究を進めることとしている。

具体的な活動としては、日本庭園の伝統的空間文化と技術を未来へ継承すべく日本庭園の「こころ」（哲学や思想）と「わざ」（日本庭園を形作る技術）の2部会構成をとり、ディスカッション、シンポジウム、現地検討会を行い、日本庭園の普遍的な価値を体系的に把握することとしている。

「庭園」をテーマとした卒業論文に日本庭園協会賞受賞者が協力

2020年度東京農業大学地域環境科学部造園科学科の4年生相原眞人さんの卒業論文を作成するにあたり、日本庭園協会受賞者の小口基実氏（第2回、1993）、曽根三郎氏（第3回、1994、代理・子息将郎氏）、高橋良仁氏（第4回、2005）、小沼康子氏（第8回、2009）の4名がヒアリング調査に協力した。

『日本庭園協会賞受賞者の作品などに見る平成時代の庭園の潮流』と題する卒論は、近年、人々が身近に感じられる日本庭園が少なく、それを過去の文化と感じる人が多くなってきている現状を打破し、22世紀まで継続し続ける文化とするために「新たな日本庭園の構築」が求められているとし、その課題解決のために、日本庭園協会賞受賞者に着目し、インタビュー形式で得た回答を分析・考察したものである。

当協会としては、今後とも造園界での活躍を目指す学生や若人への協力は惜しまない姿勢で望む方針である。

訃報

当協会理事、国際活動委員会委員長の三橋一夫氏が、令和3年5月27日、ご逝去されました。享年81（満80）歳でした。ご冥福をお祈りするとともに、謹んでお知らせします。号を改めて、三橋氏のご功績を紹介し、追悼の意を表したいと思います。

委員会からのお知らせ

技術委員会

●本年度の連続基礎講座を11月に全2回、オンラインで開催する。講師、内容詳細は別途お知らせする。

●5月23日（日）に開催された2021年度日本造園学会全国大会ミニフォーラム『日本庭園の「わざ」―石の運搬と据え付けに関する伝承造園技術の検証』において、廣瀬慶寛技術委員長が、都立芝公園内もみじ谷の「もみじ滝」の修復工事について話題提供した。

●造園アカデミー会議（事務局・日本造園組合連合会）では、9月11日（土）、12日（日）に「災いを転じて希望となす造園力」をテーマにシンポジウムのオンライン開催を予定している。1日目の講演では、当協会からは高橋康夫会長が「東日本大震災復興記念庭園」について「東日本大震災からの復興―ボランティアによる復興記念庭園の施工にみる造園力」と題して発表する。2日目当協会は、東日本復興記念庭園の映像をZOOM上で映像を流しながら、宮城県支部会員が復興に向けた作庭理念やエピソードなど解説をする。参加申込など詳細は改めてお知らせする。（東日本大震災復興記念庭園は10，11頁参照）

国際活動委員会

●ロシア科学アカデミー V・L・コマロフ記念植物研究所 ピョートル大帝植物園主催の国際学術会議「日本庭園～植物学、意味、景観」が5月31日から4日間にわたりオンライン開催された。当協会から国際活動委員の細野達哉氏が「中島健の日本庭園デザインの特徴」と題し、国土交通省委託の「令和2年度海外日本庭園再生プロジェクト・ロシア科学アカデミー中央植物園日本庭園（モスクワ市）の修復計画」において同庭園の作庭者中島健氏について調査収集した内容から、氏の造園観や作風について分析した成果を発表した。

新入会員・氏名（住所）

（2021（令和3）年1月1日から6月30日入会）

髙﨑 義久（石川県）／深田 佑二（石川県）／大橋 伸哉（東京都）／黒田 泰隆（石川県）／竹内 智子（神奈川県）／秋風 康祐（島根県）／及川 和俊（宮城県）（入会順・敬称略）

編集後記

★「清澄庭園再生プロジェクト」連続講演会、前号掲載の第3回（内田青蔵先生）、第4回（松島章先生）と今号第5回（亀山章先生）の講演内容の校閲・校正は内田均、小沼康子が担当。

編集担当：小沼康子／内田 均／鈴木貴博／豊蔵 均
本文デザイン：由比まゆみ